

長岡市・関係団体共同記者発表要旨

日 時：令和元年12月5日（木）午前10時から

会 場：アオーレ長岡西棟4階 第二委員会室

【発表項目：米百俵のまちの“スポーツによる人づくり”のガイドライン

「NAGAOKA SPORT Compass」を策定】

出席者：公益財団法人長岡市スポーツ協会 会長 市村 輝男

長岡市長 磯田 達伸

同席者：公益財団法人長岡市スポーツ協会 振興係長 室賀 大樹

長岡市スポーツ振興課 総括主査 石川 智雄

（司会）

これより、長岡市少年スポーツ活動ガイドライン「NAGAOKA SPORT Compass」の策定に関する公益財団法人長岡市スポーツ協会と長岡市の共同記者発表を開催します。

まずは、長岡市長、磯田達伸がごあいさつを申し上げます。

（長岡市長）

このたび長岡市との協働により、長岡市スポーツ協会から「NAGAOKA SPORT Compass」という冊子が発行されることになりました。長岡市は長岡市スポーツ推進条例に基づき「スポーツによるまちづくり」に取り組んでいますが、この冊子は「スポーツによる人材育成」の指針となるものです。

まずスポーツというと、競技力の向上や、勝つにはどうしたらいいかということが大きな目標となりますが、発達段階で考えると、私は自分で考えて自主的に行動できる、そして自分の目標を立てて、そこに挑戦できる青少年を育てたいという思いがあります。

そういう意味では、人材育成の考え方、米百俵の考え方に合致するものですので、スポーツに携わる長岡市民すべての方々から趣旨をご理解いただいて、子どもたちへのスポーツの普及、指導に当たっていただきたいと思っています。

先般、ラグビーのワールドカップがありましたが、今年の流行語大賞に「ONE TEAM」という言葉が選ばれました。活躍する日本代表チームを見て、自分で考え、自分で判断し、自分のやるべきことをしっかりとやっている自立した人間の姿を見ることができて、それはある種の新しい驚きでした。全員の個性が違うのに、一人ひとりが自分の考えで動いているなという、その驚きです。

まさに、長岡でスポーツに取り組む子どもたちも、ぜひそういうスポーツマンになってもらいたい

ということです。自分で考え、自分で行動できる自立した人間、自分で目標を立て、それに向かってまい進するスポーツマン、それが長岡の「スポーツによるまちづくり」の一つの大きな目標です。

この官民協働で作成したガイドラインは、おそらく全国で初めてのものです。官民協働で、スポーツによるまちづくり、スポーツによる人材育成を頑張っていることを、私は本当に誇りに思っています。

(司会)

続きまして、公益財団法人長岡市スポーツ協会会長からごあいさつをいただきます。

(スポーツ協会会長)

長岡市スポーツ協会は、今ほど市長からお話がありました「スポーツによるまちづくり」の具現化に向けて取り組んでいます。

特に、2020東京オリンピック・パラリンピックを見据えた中で、「長岡市民スポーツ応援団」を組織して、長岡産トップアスリートを物心両面から応援する活動を推進し、市民とアスリートが身近に交流できる場を設け、多くの市民の皆さんからスポーツに対する理解と協力を得ているところです。

一方、小・中学校におけるスポーツ活動の環境は、急激に変化しています。子どもたちの育成・強化は、学校現場を離れ、スポーツ少年団に象徴されるような地域のスポーツクラブに移行せざるを得ない状況の中、指導に当たってのガイドラインが必要ではとの認識が市と一致しまして、このたび連携・協力して作成したものです。

作成に当たっては、上意下達式なガイドラインではなく、子どもたちを中心に置いて、指導者、保護者が横並びの目線で子どもたちの成長を図ることに主眼を置いて作成を進め、特に競技団体のコーチなどの意見を多く聴取し、現場目線を重要視しました。

スポーツ協会としましては、子どもたちがスポーツの魅力を体験し、夢を持って成長すること、そして競技力向上の面からも、目先の勝利にこだわるだけではなく、技術を高め、勝利するという視点から、スポーツ本来の意義や効果を認識し、相手を尊重し、ルールを守り、ともに目指し行動する指針としてこの「SPORT Compass」を活用し、スポーツによるまちづくり、また人づくりを推進し、寄与していければと思っています。

(司会)

続きまして、「NAGAOKA SPORT Compass」の策定に携わった長岡市スポーツ協会と長岡市の担当者がガイドラインの概要や今後の活用方法等を説明します。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

長岡市スポーツ協会は、平成30年10月ごろから各種委員会、会議等において、ガイドラインを策定することを決定しまして、平成31年1月に総合監修を新潟大学の篠田邦彦名誉教授にお願いしました。

そして、現場目線でなるべく時間をかけて多くの指導者、関係者に意見を聴取するということが、形式的につくるものではなくて、長岡市のスポーツ関係者全員が守る約束ということで、選手、保護者、

競技団体それぞれが目指す姿を入れた、長岡オリジナルのガイドラインを作成しようと、今年の4月から本格的に策定に着手しました。

4月からこの12月にかけて、意見集約の機会を64回設け、プレーヤー100人、保護者115人、スポーツ指導者、競技団体の役員・関係者778人の延べ993人、約1,000人から意見をいただき、作成したものです。

（長岡市スポーツ振興課 総括主査）

続きまして、策定にあたっての基本的な考え方、内容について説明します。

長岡市が掲げる「スポーツによるまちづくり」、そして「スポーツによる人づくり」ということで、「スポーツマンシップ」を大きなコンセプトとして考えました。

冊子に書いてある内容は、言ってみれば当たり前のことではないかと思われる方が多いかもしれませんが、当たり前を当たり前に行っていくことを考え方の基本としてスタートしています。

冊子は「目指す姿」、「記録編」、「資料編」の3部で構成しています。

まず「目指す姿」ですが、ここに記載する具体的な行動や考え方は、一番多くいただいた意見を基にして何度も編集会議で練ったもので、プレーヤー、保護者、指導者、競技団体の四つの対象別に作成しています。

「記録編」は、冊子を配布して終わりとならないよう、活用してもらい、コミュニケーションを活発にする狙いがあります。まずは競技団体が話し合い、所属するチームや個人に向けて考えを伝え、それを受けて、自分たちのチームはどうしようかと話し合う。そして、個人として、自分自身が何を目指していきたいかを記入します。取り組む重点は毎年変わってもいいですし、同じものが2年、3年続くこともあり得ると考えています。

最後の「資料編」には、主にそれぞれの立場で知っておいてもらいたいポイントを記載しており、今後の研修に活用します。

「SPORT Compass」は、市民の声、多くのスポーツ関係者の声をもとに作成していますが、日本スポーツ協会、日本スポーツマンシップ協会の協力とともに、コンプライアンスについては、弁護士やスポーツ心理学の教授からも監修いただいています。

（長岡市スポーツ協会 振興係長）

冊子は、今年度は8,000部を作成し、市内のスポーツ少年団、指導者、保護者、プレーヤーと、競技団体のほか、学校教員等に配布します。保護者は、ご自分のお子さんと共有していただきます。そのほか、長岡市スポーツ協会のホームページからダウンロードができるようにします。

活用ですが、12月7日に市内のスポーツ関係者が一堂に会する「長岡市スポーツシンポジウム」でこのガイドラインの発表と活用方法の紹介等を行います。

そのほか、保護者、プレーヤー、指導者、競技団体がそれぞれに学ぶ機会を年3、4回開くことなどを計画しています。

また、各競技団体においては、大会の際にPRや「重点的に守る項目」として設定したり、スポーツ少年団、クラブチームがたくさんあるようなところには、種目別に指導者の会議を開催して、活用方法を協議したり、競技団体ごとに重点的に取り組む事項を決定していきます。

(長岡市スポーツ振興課 統括主査)

活用について補足ですが、長岡市としても各小学校区にいるスポーツ推進委員を活用して、地域のスポーツ活動でも普及していきます。

また、小・中学校の全教職員に配布して、小学校においてはスポーツ少年団で配られているものとして共通理解を図りますし、中学校では部活動基本方針と併せて活用します。

また、市政だより等でも周知を図っていきます。

(司会)

これより質疑をお受けいたします。質問がある方は、挙手をお願いします。

(記者)

現場の意見を重視して取り入れたとのことですが、具体的にどのような意見をどのように取り入れたのか、お聞かせください。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

まず子どもの意見として、保護者に対して、勝ち負けばかりを言ってほしくないとか、もう少し練習をよく見てほしいなどが多かったです。その内容は、保護者の「目指す姿」に記載しました。

それから、子どもたちから指導者に対して、もう少し楽しい練習がしたい、競技団体から指導者に対しては、学ぶ気概を持って研修会に参加してほしいといった声がありました。

それぞれの「目指す姿」に書いてある内容は、求める声で多かったものを中心に記載しています。

(記者)

保護者からはどのような意見があったのでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

主に指導者に対して、コンプライアンスに係る部分ですが、子どもを尊重してほしい、コミュニケーションをとってほしいという声がありました。

(記者)

このガイドラインが対象としているプレーヤーの年齢層をお聞かせください。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

主にスポーツ少年団の小学生と中学生を対象にしています。

(記者)

小学生の場合はスポーツ少年団に配布するとのことですが、どのようにこれを教育現場に根付かせていくのか、もう少しお聞かせください。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

優しき勝者であり、善き敗者であることがスポーツマンシップの考え方になるのですが、それは人間関係や道徳教育の部分にも通じる内容です。人づくり教育というところで、小学校の先生方にも配布して、参考にしてもらえたらと考えています。

(記者)

中学校に対しては、部員全員に持たせるとか、あるいは、なぜこれが作成されたのかなどを生徒に説明する機会を設けてほしいなどの依頼を行うのでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

部活動の顧問の先生が、冊子の内容を理解することで考えています。また、校長会、長岡市中学校体育連盟の会議でも冊子を紹介します。すべての生徒に直接渡すことは、現時点で考えていません。

(記者)

中学校では、保護者が勝利至上主義になって指導者を突き上げる事例なども聞いていますので、中学校に「配って終わり」だと、この冊子のいい面を發揮しないのではと思うのですが、いかがでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

この冊子はページごとにダウンロードできます。PTA総会や部活動など、それぞれ必要な場面で保護者や子どもに配布できますので、活用していきます。

(長岡市長)

教育委員会は教育委員会の考えもあろうかと思いますが、私が冒頭申し上げたように、これは長岡の小・中学生を中心とした、スポーツによる青少年の育成の根幹となる部分が多く記載されていますので、小学校のみならず、中学校の部活にもしっかりと浸透するように、教育委員会と一緒に進めていきます。

(記者)

スポーツ少年団の小学生には全員に配るということでよろしいでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

全員に配布します。

(記者)

市内でスポーツ少年団に入っている小学生は何人いるのでしょうか。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

今年度の登録人数は約2300人です。

(記者)

まずはその2300人のプレーヤーとその保護者、指導者に浸透を図って、先ほど市長がおっしゃたように中学生への配布なども考える、ということよろしいでしょうか。

(長岡市長)

私はそう考えていきます。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

今回は競泳や飛込競技、柔道などの競技団体やサッカーなどのクラブチームに参加している中学生のプレーヤーにも配布します。

(記者)

長岡のスポーツに関わる人たち全員に対する指針ということで、これに沿った部活動指導をしてほしいと中学校にも呼びかけていくということでしょうか。

(長岡市長)

私はそう考えています。

また、高校の部活動もありますし、あるいは社会人スポーツもあります。スポーツ協会が関わっている部分もありますし、教育委員会、長岡市が関わっている部分もありますので、スポーツにかかわる人たち全体に普及していくよう考えていきます。

(記者)

今、中学校の運動部の部活動に入っている生徒は、どのくらいいらっしゃるのでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

今年度の長岡市立中学校の運動部員は4552人で、全体の67%です。

(長岡市スポーツ協会 会長)

長岡市中学校体育連盟でも「SPORT Compass」の意義や必要性はご理解いただき、普及させていきたいというご意見もいただいています。

ただ、「SPORT Compass」の制作の意図は、小学校6年生の子どもたちが見れば1年後には中学生になります。小学校の子どもたちが「SPORT Compass」に基づいて、しっかりした意識を身に付ければ、中学校に進学してもそれを引き継いで大人になります。

やはり小学校の子どもたちを主体に「SPORT Compass」による意識付けをして、それが中学校、高校と引き継がれていくのではないかと考えています。

(記者)

今回の策定には中体連は入っていたのでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

協力団体として、編集と意見聴取に加わっています。

(記者)

冊子の「コミュニケーション」の部分なのですが、これを掲載した経緯をお聞かせください。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

これは意見聴取によるものではなく、以前、長岡市スポーツ協会が講演をお願いした専門家の講義を参考に作成したものです。

(記者)

指導者と子どものコミュニケーションのなかで、あまり望ましくない言葉もあつたりしたのではないかと推察するのですが、いかがでしょうか。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

ハラスメントの問題として、コーチとプレーヤー、あるいは保護者とのコミュニケーションが円滑に進んでいない状況も見受けられたので、このコミュニケーションのページを作成しました。

(記者)

このガイドラインは長岡市スポーツ協会と長岡市の両輪で策定したと思うのですが、これを進めるにあたって新しい組織を作るなどのお考えはありますか。

(長岡市長)

特にありません。長岡市のスポーツは、長岡市スポーツ協会が統括していると考えています。学校でのスポーツはスポーツ協会の枠組みに入っていない部分もありますが、そこは教育委員会としてしっかりと進めていきます。

(記者)

今回の協力団体には、高野連は入っていないのでしょうか。

(長岡市スポーツ振興課 総括主査)

入っていません。新潟県には新潟県高等学校野球連盟がありますが、長岡市を対象とした組織区分にはなっていないということもあります。もちろん、長岡市の高等学校には紹介します。

(記者)

長岡市のこの枠組みは、高校野球は対象としていないということでしょうか。

(長岡市長)

高校の部活動には新たなアプローチも必要かと思います。これはどちらかというと小・中学生向けの冊子ですので、高校あるいは大学のスポーツ関係者向けはどのようなものかというのは今後の課題になりますが、必ずそこにアプローチしていきたいと思います。

(記者)

野球の球数制限など、個々のスポーツにおいてガイドラインを作る予定はあるのでしょうか。

(長岡市スポーツ協会 専務理事)

スポーツ協会には硬式野球協会という組織がありますので、市内の高校の野球部にはそこを通じて周知を行います。

それから、個別の競技の指針的なものは、中央の競技団体を通じて指導されているのが現状です。

(記者)

約1000人から意見を集約したということですが、どのような形で意見を集めたのでしょうか。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

研修会や講習会などに集まった指導者、保護者にグループワーク形式で聴取したほか、直接チームやクラブを訪問して意見を聴取しました。そのほか、個別に競技団体のヒアリングを行っています。

(記者)

ホームページなどで意見は集めたのでしょうか。

(長岡市スポーツ協会 振興係長)

初稿ができた段階で、スポーツ協会のホームページ上でパブリックコメントを実施しました。

(記者)

今後、ガイドラインを改訂することはあるのでしょうか。また、そのタイミングはいかがでしょうか。

(長岡市長)

多くの方々にご理解いただきながら、どのような意見が出てくるかを見て改訂を考えます。タイミングは、今の段階で決めていません。